様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５年　５月　２０日現在

機関番号：10101
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520812
研究課題名（和文）　樺太観光におけるまなざしの形成とマイノリティの表象

研究課題名（英文）　The Formation of the Tourist Gaze and Minority Images in Karafuto

研究代表者
宮下　雅年（MIYASHITA MASATOSHI）
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：90166174

研究成果の概要（和文）：北原白秋の『フレップ・トリップ』(1928) の樺太イメージは、以後の樺太観光に道筋を付けた。本作における風物・風習・異民族の記述が島民の郷土の誇りに直結していった。戦後、その生まれ故郷は奪われてしまうが、だからこそ、望郷の念は募り、今もサハリン観光と言えば帰郷ツアーが中心である。そこにあるのはもはや白秋の「樺太」ではなく、往時の日常生活への思慕である。サハリン州政府も観光の好影響を重視して様々な対応を開始した。

研究成果の概要（英文）：Kitahara Hakushu's travelogue published in 1928 was a trailblazer in the prewar tourism of Karafuto. In other words, his descriptions of the peculiar scenery, customs and life of the island became a source of pride and love of their homes for many of the islanders. After the WW2 they lost their homes and a wave of nostalgia came over them all the more for its loss. That is why home-coming visits still consist mostly of the trips around Sakhalin by Japanese. Naturally, it's not the Karafuto images once admired by Hakushu but their own childhood memories that invite people to the trip. The Sakhalin state government, thinking highly of a positive impact that tourism exerts on their life as a whole, has called for efforts to create better conditions for the Japanese visitors.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学
キーワード：樺太・観光・故郷・郷土・帰郷・北

１．研究開始当初の背景

日本人が明治以降「南」の地に抱いた欲望や屈託の軌跡は種々の著作に跡付けることができるが、「北」への思い、とりわけ樺太については、これを学術的に多角的に検討する著作は以外に少なく、しかも観光のコンテクストにおいてそれを論じたものは皆無であった。

また、1990 年代から盛んになる旧島民の帰郷ツアーに代わって、サハリン観光の目玉は、エコ・ツアーやスポーツ・ツアーへ転じつつあると言われた。今後のサハリン観光を展望するうえでまずその実情を知る必要があった。

２．研究の目的

日本人が漠然と抱いていた「北」の異郷への憧憬はどのように醸成されたかについて、明治後期から昭和初期における樺太観光の検証を通じてそれを明らかにする。

また、今日再び活性化していると考えられるサハリン観光について往時と比較しながらその状況を明らかにする。

３．研究の方法

⑴特に南樺太を舞台にした紀行文や新聞・雑誌記事、観光案内、広告チラシにおいて、この異郷や異族がどのように記述されたか、風物や風習はどのように名づけられ、描写されたかを明らかにする。

⑵初期の旅行者として柳田國男や北原白秋ら近代日本の文学者を取り上げ、その「ロマンチックなまなざし」が、一般大衆の「集合的なまなざし」にどんな影響を及ぼしたかを見極める。

⑶樺太引き揚げ者との面談や帰郷ツアーの同行を通じて離郷者の樺太/サハリン像を明らかにする。

⑷サハリン観光関係者の面談を通じてサハリン観光の現況および将来展望を明らかにする。

４．研究成果

⑴白秋の樺太探求

北原白秋の『フレップ・トリップ』(1928) は、白秋が 1925 年（大正 14 年）の 8 月に鉄道省主催の樺太観光団に加わり、島巡りをした際の紀行文であり、その後、雑誌『女性』(1925 年 12 月号～1927 年 3 月号）に掲載された。それは、すでに歌人、詩人あるいは童謡作詞家として広く名が知られていた白秋の天衣無縫の行状を綴ると同時に、そこには白秋の詩想の根幹に関わる感慨が記されている。後に、その旅情は「原始的地方色」というキャッチフレーズで商品化され、樺太観光の大衆化に道筋を付けることになった。

それ以前、1917 年（大正 6 年）に白秋は「さすらいの唄」を書いており、芸術座による『生ける屍』の公演で主人公役の松井須磨子が劇中歌として歌って人気を博した。これは今日まで歌謡曲の世界で歌い継がれている北への慕情と漂泊の嚆矢となるものであるが、そこで夢想される北の有り様は壮大と言うよりもむしろ大雑把あるいは紋切り型と言うべきである。

行こか　戻ろか　北極光の下を
露西亜は北国　はてしらず
西は夕焼け　東は夜明け
鐘が鳴ります　中空に

本書においても白秋は随所で自前の「北」の旅愁を持ち込むが、今度は身体を張って旅をしている身であり、思い込みをはぐらかされ、裏切られてはその迂闊さを思い知る。

樺太観光はそのはじまりから自然の風物と対比させて工場見学などの体験的な産業ツーリズムを盛り込んでいた。昭和初期に北海タイムス社が作った栞『北海道樺太交通全図』の「名所遊覧地案内」の項には、「大泊町△亜庭神社△南樺公園△パルプ工場（王子）　豊原町△樺太神社△樺太廳△パルプ工場（王子）　真岡町△真岡神社△露船長墓碑△パルプ工場（樺工)」と記載されており、目玉はどこも神社とパルプ工場である。このパルプ・製紙業の隆盛のおかげで、白秋の旅から 10 年後、林芙美子がここを訪れた 1934 年ともなると、乱伐や山火事によって樺太の山は方々が禿山に成り果てた。ともあれ、白秋一行も真岡の製紙工場に赴いて大がかりな機械仕掛けに仰天し戦慄するのであるが、さすがに白秋は機械にすくみ上がるだけではなく、ハーマン・メルヴィルの「乙女たちの地獄」さながら、「丸太の裁断からこの荷造りまで」の工程をサディスティックな美女殺しに見立てて、点在する女工たちの疲弊を見て取っている。ちなみに、この工場は今では訪れる人もなく、廃墟と化して、おどろおどろしい姿を間宮海峡に晒している。

島の自慢は近代的な工場と僻遠の地に厳

かに佇む神社であった。工場について白秋の反応は冷淡なものであった。では神社はどうであったか？　白秋はたとえば樺太神社に詣でて次のように思う。「このほのかさは、この和御魂のかおりは、また荒御魂の融和は。この神々しさは。この幽けさは。…だが、これが樺太であろうか。この親しさは、はるばるとした旅情ともちがう」と。白秋は樺太神社のしめやかな佇まいに感動しつつ、反面、これは畢竟どこにも見られるものであり、東京の二番煎じとして馴致され、整形されてしまう樺太にある種の違和を感じている。これは白秋が求めた樺太ではないのである。

では白秋が樺太においてひたすら驚き、浮き立ち、没入したものは何であったろうか？白秋が樺太に求めた深淵、しかもこれまでの旅の出来事とは違ってその期待を裏切らなかった「北方の陰暗」に遭遇したのは海豹島という小島であった。アザラシの島と書くが、観光団がそこに見たのは大小数万頭のオットセイの群れであり、白秋には空前絶後、筆舌に尽くしがたい光景であった。それは、「匍匐し、生殖し、吼哮する海獣の、修羅場の、歓楽境の、本能次第の、無智の、／また自然法爾（じねんほうに）の大群衆」であった。

白秋が樺太に求め、見出したものは、ムラやマチが形成される遥か以前の「自然法爾」の世界のありさまであって、人のやりくり算段を越えた、人智を圧倒する根源的な生命力と死の躍動であった。観光団を乗せてきた汽船のエンジンが近代文明であるとすれば、群棲する海獣のエンジンは原始的単純であった。「原始的単純」とは白秋の『緑の触覚』中の「童謡本論」に出てくる言葉であるが、たとえば、「薔薇ノ木ニ／薔薇ノ花サク、ナニゴトノ不思議ナケレド。」（「薔薇二曲」）に典型的に伺われる要素である。樺太という鏡は白秋の「原始的単純」というその詩魂の真髄をダイナミックに映し出した。それが大衆化される際には不思議を不思議として感得した白秋の体験は希薄化されてしまい、絵葉書の静止画になってしまうが、そのきっかけとなった白秋の紀行文は、植民地主義的な言辞の批判も含めて、それ自体として正当に評価しなくてはいけない。

(2) 樺太における郷土の創造あるいは故郷の想像と大相撲力士

樺太住民の間に郷土あるいは故郷という意識が醸成されるのは 1930 年代と思われる。ひとつの指標が郷土力士の誕生である。力士に注目するのは、昭和 10 年代の樺太の発展と大相撲人気が時期的に重なり、力士は首都を中心としながら全国に雄飛する郷土の誉れであり、他のスポーツ選手とは比較にならないほど「全国区」的な存在であったからである。

とはいえ、樺太出身者で幕内まで昇り詰めた力士は若浪（わかなみ）義光（1914-1982）と清恵波（きよえなみ）清隆（1923- 2006）の 2 人しかいない。若浪は昭和 10 年（1935 年）の 5 月場所―夏場所―に初土俵を踏み、昭和 13 年（1938 年）の 5 月場所に十両入りし、昭和 15 年（1940 年）の 5 月場所に入幕を果たすが、1 場所で十両に落ち、昭和 17 年（1942 年）の 1 月場所―春場所―を最後に引退している。他方、清恵波の初土俵は昭和 15 年（1940 年）の 1 月場所、十両入りは昭和 22 年（1947 年）11 月の秋場所、昭和 23 年（1948 年）の秋場所に 9 勝 2 敗で十両優勝、翌年、昭和 24 年（1949 年）1 月の春場所に新入幕、以後、十両に落ちたりもしたが、幕内在位 36 場所、昭和 35 年（1960 年）1 月の春場所を最後に引退した。

若浪は戦前戦中の力士であるが、清恵波は事実上戦後の力士である。したがって同じく樺太出身者といえどもおのずからその意味合いは違っている。すなわち、若浪は現に「郷土力士」と呼ばれ、樺太の新聞にも贔屓目に紹介され嘱望されていたが、一方の清恵波は、そのしこ名（恵は恵須取から取った）には明らかに郷土の響きが込められているにもかかわらず、全国にその名が知られたときにはすでに樺太の「郷土力士」ではなかった。一般論として、郷土と故郷は意味が異なる。「『郷里』『故郷』『ふるさと』は、生まれた土地から一度は離れて、他の土地に暮らしたことがなければいけないが、『郷土』は、その土地で生まれ育った所なら、一度も離れず現に住んでいてもいい」（『角川類語新辞典』）というわけである。

若浪に声援を送った大人たちにとって、生地ではない樺太はその定義から郷土とは言い難いけれども、にもかかわらず、日中戦争戦時下、銃後の守りが喧伝されはじめた当時、ここでも「郷土の空を守れ」などと言われた

ように、樺太はすでに多くの人々に「郷土」として受け取られ、少なくともついの住処たる「郷土」にしなければいけないという気運があった。昭和 12 年（1937 年）発行の『樺太郷土読本』に示されるように「郷土教育」のはじまりがこの時期に見られる。本書は主として間宮林蔵や松浦武四郎、金田一京助、河東碧梧桐、北原白秋らの樺太紀行文から抄出し、国語授業の副読本用に編集されたものであるが、「本書の編述に当たりては、郷土愛護の念を啓培し、延いては愛国の至情を奮起せしむる点に留意した」（「緒言」）と述べられているように、当地の「開拓に従事したる先人」（同）の功労を称え、もって、その労績を受け継いでいまも開発に「堅忍不抜一段の努力を積」（「令旨」）んでいる島民に誇りを持たせ、自信を植え付けようとするものである。立ちはだかる自然の猛威を克服してよくぞこの地に「亜寒帯文化」（当時の樺太を語る際の常套句）を築いたという自負あるいは自己陶酔が根底にある。

若浪という相撲取りはこのように新たに郷土愛を養おうと目論まれている最中にめきめきと頭角を現した力士である。とはいえ、若浪の出身は「樺太泊居郡恵須取町」となっているが、実は、北海道の東川町が生地であり、大正 12 年（1923 年）9 歳のときに何かの理由で恵須取に移住しているのだから、郷土を字義通りに厳密に理解すれば、「郷土力士」ではないかもしれない。だが、「郷土」が創造／想像される中でその期待を一身に背負わされて若浪は「郷土力士」になったのである。

一方の清恵波はどうだろうか？　故郷はその定義上〈隔たり〉を前提とする。成田龍一（1997）によれば、故郷という概念はまず 1880 年代の国民国家日本の成立期に登場し、1930 年代前半、近代化・都市化に伴う人口移動の本格化に並行して提供されたのだという。（そして戦後の高度成長期がその「変容期」であるという。）「ふるさとは遠きにありて思ふもの」と歌われた所以である。引き揚げによってこの隔たりが果てしなくなり、事実上故郷が遠くかすんで見えなくなってしまったときに「故郷」は逆説的にむくむくと浮上し、人々を鷲づかみにする。それは実体というよりも幻想の空間である。そのように理解すると、戦後の樺太はまさにその種の情念を掻き立てる場所であった。その島を郷里とする人々がどのようにして「故郷」をつくりあげて行ったのか、これを考えるうえで、清恵波の戦後 10 余年の活躍（さらには引退後の相撲協会幹部たる中川親方の人生）はちょうど樺太引き揚げ者の奮闘と重なってひとしお興味深いものがある。

清恵波の新入幕は戦後の昭和 24 年（1949 年）のことである。新入幕から 10 年余り相撲を取って、昭和 35 年（1960 年）に引退であるから、清恵波の取組がラジオ中継されたことはたしかではある。しかし、清恵波の故郷は敗戦で奪われ、ラジオでも番付でももはや「樺太出身」とは紹介されなかった。ということは、清恵波が恵須取町出身の関取というのは知る人ぞ知る「秘話」であったはずだ。そこはもはやかつてのように多くの日本人が住むところではなくなってしまったのだから、定義上、郷土力士とは言えないが、経緯を承知している樺太引き揚げの相撲ファンにしてみれば、清恵波こそは郷愁を誘う力士であったはずだ。一旦は十両に落ちた清恵波であるが、昭和 34 年（1959 年）1 月場所に 35 歳 7 ヶ月で再入幕を果たし、これは戦後 2 位の記録（当時）であったという。地味ではあるけれども地力とそれ相当の話題性を備えており、その再起に我が身を重ねた人々も多かったのではないだろうか。

清恵波が喚起する故郷はすでに奪われ、多くの人々は今も帰ることすらできない。この力士もまた故郷喪失者なのである。郷土力士若浪は新聞で持て囃されはしたが、（ラジオの普及率や放送時間など）メディアの制約もあって、全島民の郷土意識を押し上げたと言えるほどの威勢は残念ながらなかった。他方、清恵波はその活躍の陰で郷土を奪われ、しこ名が全国に知れたときにその故郷の名は秘められた。清恵波と声援者の関係は、すでに失われたもの、いわばこころのふるさとを巡るやりとりだけに、その声援は秘かにどこかくぐもったところを帯びながら、思いは人知れず熾烈だったのではないかと想像する。

(3) サハリン州政府の観光政策

筆者は 2012 年 8 月 17 日にユジノサハリンスクでサハリン州政府スポーツ・観光・青少年政策省マゴメド・マゴメドフ大臣と面談し、州政府のサハリン観光に関する考え方を聴

いた。

州政府は、観光がサハリン社会の発展によい影響を及ぼすと評価し、これによって、雇用の創出、歳入の増加、生活水準の向上、インフラ整備等が図られ、地域の魅力が増すとともに民族文化・工芸の伝統維持につながると考えている。現在、「2013 年～2018 年のサハリン州における国内および国外観光の進展」という特別計画が検討されているという。サハリン州の魅力を高め、日本の観光客のみならず、他国の観光客を誘致できるサービスや施設の改善が目論まれている。サハリン州民も観光に前向きな姿勢を示しているという。

州政府が観光の目玉と考えているのはやはり当地およびクリルの自然である。とはいえ、この 10 年間でサハリンを訪れた観光客の 9 割は日本人であり、しかもその大半は帰郷ツアーであるという現状がある。（ちなみに、日本を訪れるロシア人観光客は総数の 2 割にすぎない。）

日本人観光客は「日本統治時代の建造物」への関心のほかに、サハリンには、

①アジアとヨーロッパの多文化が共生している地域
②釣りや登山等のアウトドアスポーツが楽しめる地域
③きのこ取りや山菜摘みが楽しめる地域
④温泉（鉱泉）や蒸し風呂が楽しめる地域
⑤独特の郷土料理が味わえる地域

等のイメージを抱いており、マゴメドフ大臣も今後は複合的な観光プランの立案とそれに応える態勢づくりが必要であることに同意した。

帰郷ツアーは現在、同郷会や同窓会の壮健な会員が音頭取りとなって通例 20 名ほどの団体で故郷再訪を行っており、サハリン側の世話役・ガイドはかつての同級生である韓国・朝鮮系ロシア人が担っていることが多い。このボランティア精神には敬服するばかりである。しかし、このままでは帰郷ツアーは先細ることは歴然としており、日本人のあいだに樺太の歴史を伝えながら、同時に新しい魅力を掘り出して、サハリン観光を盛り上げ、引いては、日本とロシアの友好を深めていくことが必要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１件）

①宮下雅年、樺太鏡像―北原白秋『フレップ・トリップ』と三浦綾子『天北原野』、The Northern Review（北海道大学英語英文学研究会編集発行）、査読無、No.37、2011、pp.1-10

〔学会発表〕（計　１件）

①Miyashita Masatoshi、A Home-Coming Visit to Karafuto: How a home is reconstructed after a long absence? BRIT XII 2012 FUKUOKA/BUSAN、2012 年 11 月 13 日、福岡国際会議場（福岡市）

６．研究組織

(1)研究代表者

宮下　雅年（MIYASHITA MASATOSHI）
北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授
研究者番号：90166174